

池波正太郎『仕掛人・藤枝梅安』における「善と悪」

Good and Evil in Ikenami Shotaro's *Shikakenin Fujieda Baian*

笠井 哲

福島工業高等専門学校一般教科

Akira Kasai

Fukushima National College of Technology, Department of General Education

(2009年9月14日受理)

The purpose of this paper is to consider "good and evil" in *Shikakenin Fujieda Baian*. The word called *Shikakenin* is coined word of Ikenami Shotaro who is a writer. *Shikakenin Fujieda Baian* is a story of a professional killer undertaking murder for money. Fujieda Baian of the chief character saves the life of the person as a person of acupuncture doctor in one. On the other hand, he murders a person as a killer. It is the existence of the hair's breadth whether that a human being is a good person or a evil person.

Key words: *Shikakenin*, good, evil, doctor, killer

1. はじめに

池波正太郎は、実人生においても、またその作品においても「男の理想の生き方」を真摯に追求した作家であった。それを『鬼平犯科長』¹⁾では悪を取り締まる側から、『剣客商売』²⁾では隠棲した浪人の立場から、『仕掛人・藤枝梅安』では悪の世界から追求しているといえる。

時代小説の主人公の中で、藤枝梅安は特異なキャラクターである。彼は、金で殺人を請け負う冷酷無比なプロの殺し屋なのである。如何なる理由があろうと、金をもらって人を殺すのは悪事である。ところが、梅安の表の顔は、人の命を助ける医師でもある。つまり梅安は、悪い事だけでなく「善い事」もしている。

本稿の目的は、『仕掛人・藤枝梅安』に描かれた人間の「善と悪」について考察することである。

2. 梅安の裏の顔

「仕掛人」というのは、池波正太郎の造語である。『仕掛人・藤枝梅安』シリーズは、金によって殺人を請合う「殺し屋」の物語である。「殺人」が金で取り引きされるには、キーマンが二人必要であるという。まず、「あいつを殺してもらいたい」と顔役に依頼をする人物である。第一話の『おんなごろし』においては、次のように書かれている。

この依頼人を、暗黒街の用語で「起り」という。いま一つは、依頼を受けた顔役は、しかるべき「殺し屋」をえらび、これにたのむわけで、この第二の依頼人のことを、どういうわけか「蔓」とよんでいる³⁾。

ここから読み取れるように、「蔓」は「起り」から、依頼の事情なり理由について聞いている。「蔓」は、それを納得してから、段取りをつけることになる。自分が直接に手を下すわけではないのであるが、それだけにいやが上にも慎重にならざるをえないといえる。『おんなごろし』には、また次のように書かれている。

仕掛人は、あくまでも金ずくで殺人をおこなうのだから、くわしい事情を知らなくともよい。いや知るべきでないのが定法であって、この場合どこまでも「蔓」を信頼しなくてはならぬ。そして「蔓」は「起り」がよこした大金の半分をふところへ入れ、残る半分会仕掛人へ報酬としてわたすことになっている⁴⁾。

鍼医者であった藤枝梅安の家は、品川台町の「雉子の宮」の社の南側にあった。わら小屋の小さな家は、木立に囲まれている。寛政11年で35歳になるが、助手も女中もおかず、独りで暮らしていた。

彼は、六尺に近い恰幅のよい堂々たる体躯で、頭は青々と剃りあげているが、坊主ではない。眼はどんぐ

りのように小さく、くぼんでいる。治療中はほとんど口をきかない。ものぐさで、愛想も良くはないが、鍼の腕前はよく知られていた。「仏の梅安」とか、「台町のお助け先生」などという声も聞かれる。しかし、その裏には、金で人を殺める「仕掛人」の顔があるという。闇から得た金があるからこそ、人助けもできるといえる。

3. 殺人の理由

梅安をはじめとする仕掛人たちの殺人の理由について、池波は第四話の『後は知らない』で、次のように書いている。

殺す相手や、殺さなくてはならぬ事情について、本格の仕掛人は、いっさい口を入れぬのが、この世界の定法だが、

「世の中に生かしておいては、ためにならぬやつ……」

だけを殺すのも定法である⁵⁾。

末端にあつて実際に手を汚す「仕掛人」としては、話を持ち込んでくる「蔓」のいうことを信用するしかない。だから、「起り」の依頼を選択する立場の「蔓」は、きわめて大きな責任を負っているということになる。

『仕掛人・藤枝梅安』シリーズの評価を不動のものにしたといわれている2作話『殺しの四人』は、次のような話である。梅安が仲間の彦次郎と組んで、羽沢の嘉兵衛から頼まれた久留米二十一万石、有馬侯の家来・伊藤彦八郎を暗殺する話であるが、ストーリーは意外な方向へ展開する。

かねてから梅安に深い恨みと憎しみを抱いていた、殺しの達人・井上十郎と、その仲間の佐々木八蔵の出現である。梅安は、危機に直面する。四人の仕掛人のすさまじい攻防が展開される。

池波は、この一作で読者に殺しの仕掛けの面白さをたっぷり堪能させ、「小説現代賞」を受賞した。重要なのは、この作品の導入部で羽沢の嘉兵衛の代理人として、彦八郎殺しを依頼に来た五名の清右衛門に、何気なくこう言わせていることである。

「この世の中にいてはためにならぬえやつですから、安心をして殺しておくんなまし」⁶⁾

これこそ、池波の先行する試作といわれている『闇は知っている』という作品にも、第一話『おんなごろし』にもなかった大事な言葉である。第二話以降で、

梅安が殺す相手は、「生かしておいてはためにならぬえやつ」にしぼられる。これにより、金をもらって人を殺すのは悪事に違いないが、同時に善行でもあるという論理が成り立つのである。

『仕掛人・藤枝梅安』シリーズは、これにより市民権を得たと考えられる。こうしてシリーズは、梅安や彦次郎を通じて「人間は、よいことをしながら悪いことをし、悪いことをしながらよいことをしている」⁷⁾というテーマを軸に、法の網の目からこぼれ生きている悪人を裁く、痛快な読み物となっていたのである。

梅安が心を許している、唯一の仕掛人仲間の彦次郎は、表向きは楊枝作りの職人として浅草に住んでいる。彦次郎が、「梅安さんは、よく女を殺れるね」と感心した。すると梅安は、静かにこう答えたという。

「冗談じゃない。女にくらべたら、男のほうがずっと殺りにくい。男のほうがまだしも可愛気がある。そこへゆくと女なんて生きものは、まるで化け物だよ」⁸⁾

梅安や彦次郎のように、いったん「仕掛けの道」に足を踏み入れてしまうと、そこから抜け出すことはできないという厳しさがある。

『梅安蟻地獄』には、次のように書かれている。

ただ本能的に、無意識のうちに、藤枝梅安が体得していることは、

「善と悪とは紙一重」

であつて、

「その見境は、容易につかぬ」

ということであつた⁹⁾。

梅安は、恩人である京都の鍼医者・津山悦堂が亡くなった後を、十分に継げるだけの技術を取得していた。しかし、些細なことから、道が違う方向へ行った。浪人者の女房に手を出したのであるが、その女が「無理やり脅されて……」と亭主に嘘をついた。この話を梅安から聞かされた彦次郎は、こういったという。『殺しの四人』に、次のように書かれている。

「女は、みんなそうさ。うそが人のかたちをしていやがるのだ」¹⁰⁾

浪人から木刀で痛めつけられた梅安は、嘘をついた浪人者の女房を許せなかった。商売道具の鍼を使って、人を殺した最初であつた。鍼は、あくまでも人の病を治療するためのものであるが、また人を殺める凶器にもなる。その違いを生むのは、何であろうか。梅安がいうところの「紙一重」の差であり、「ちょっとした

行き違い」からなのであろう。

『梅安晦日蕎麦』には、次のように書かれている。
悲鳴もあげずに九兵衛が、一瞬、気をうしなつて、ぐったりと倒れかかるのを左手で抱え起し、早くも、右手がふところをさぐって三寸余の殺し針を取り出し、口にくわえた。

右手の親ゆびには、ここへ入って来る前に革づくりの指輪をはめこんである。

口にくわえた殺し針を改めて取り直した梅安が、九兵衛の盆の窪へ針の根元まで打ちこんだ。

九兵衛の体がびくびくと痙攣し、すぐにやんだ。ほとんど、血もにじまぬ。

深く突き通った殺し針は、急所中の急所である延髄に達し、田中屋九兵衛を即死せしめたのであった¹¹⁾。

梅安は、「殺し屋」の闇の世界から、ひとたび町の鍼医者に戻ると、黄八丈の着物に紋付の黒の羽織になる。足元は、もちろん白足袋で、坊主頭には御納戸色の焙烙頭巾をかぶる。その姿を見ては、人殺しを金で請け負っている男とは、誰一人として気づきはしないという。

4. 仕掛人仲間・彦次郎

次に、梅安を取り巻くシリーズの常連たちとの関わりについて、見ておきたい。

まず、仕掛人仲間である彦次郎の家は、浅草のはずれ、塩入土手に沿った木立の中にあった。彼は独り暮らしで、梅安より少し年上になるが、前述のように表の顔は、楊枝職人であったという。彦次郎が作る、歯を磨くための「ふさ楊枝」と「平楊枝」は、浅草観音の参道にある「卯の木屋」だけで売られていて、評判がよかったのである。

小さい頃は、粟飯もろくに食べられなかったという彦次郎は、下総の松戸の在の水のみ百姓の家に生まれた。六歳のときに父親が病死したというから、梅安の境遇とよく似ている。実の母親は、別の男を家に引き入れると、彦次郎にこう告げたという。『秋風二人旅』に、次のように書かれている。

「彦よ。てめえを孕んだとき、水にながそうと、何度おもったか知れやあしねえ。ああ、ほんとにあのとき、てめえをながしてしまえばよかったよう」¹²⁾

十歳で家を飛び出した彦次郎は、釜原の馬込村の万

福寺の寺男となり、結婚して娘を授かった。しかし、その幸せは長く続かなかった。彦次郎の目の前で、二人の浪人に陵辱された妻は、娘を道連れにして首を吊ってしまったのである。『梅安晦日蕎麦』に、次のように書かれている。

金づくで、人を暗殺する仕掛人という暗い稼業へ彦次郎が踏み込んで行ったのも、女房・子の非業な最期が原因だったと、いえぬこともない。

世の中には、生きていてもらっては世の中のためにならぬ人間どもが法の網の目からこぼれ、ぬくぬくと生きている。

本格の仕掛人は、そうした連中のみを目ざして殺しを行うのがたてまえであった¹³⁾。

ある時、一仕事を無事に終えた梅安と彦次郎は、お伊勢参りの旅に出た。ふとしたことから彦次郎は、その途中で我が妻子の敵である無頼浪人に遭遇し、京都郊外で梅安とともに討つことができたという。

彦次郎は、「おれは、もう思い残すことなく、いつでもあの世に行ってもいい」といって、梅安の前に両手をつくのであった。以前から万福寺への墓参りを絶やさなかった彦次郎は、さっそく妻子の墓前に報告したという。

ところで、楊枝職人である彦次郎が仕掛ける得意技は「吹き矢」であった。

『春雪仕掛針』に、次のように書かれている。

小舟の船頭が、いきなり、

「お武家さま」

大声に呼びかけてきたのである。

はっと見た。

船頭が口にくわえていた煙管が、いつの間にか、一尺ほどの竹筒のようなものになっている。

その竹筒が、びゅっと鳴り、中から奔り出てきたものが本間左近の左眼へ突き刺さった¹⁴⁾。

この小舟の船頭の正体は、彦次郎なのであった。

5. 浪人・小杉十五郎

第七話から、このシリーズに欠かせない魅力ある人物、すなわち小杉十五郎と名乗る凄まじい人斬りの浪人者が、梅安たちの戦列に加わってくる。

小杉十五郎は、瘦身で体躯は少年のように小さい。眼は大きく、いかにも元気が溢れている。彼は、浪人の息子で、太刀一本を落とし差しにした剣客である。浅草の元鳥越にある「奥山念流」の道場を開いている

牛堀九万之助の師範代を務め、報酬を得ていた。もちろん十五郎は、「闇の世界」とは無縁のところにいる。

十五郎が初めて登場するのは、第七話の『梅安蟻地獄』である。彼は、梅安に年恰好が似た悪人を狙っていたのであるが、間違っただけで梅安を標的にする。勘違いに気づいた十五郎は、次のようにいったという。

「おれは、剣術を、すこしやる」
 のっけに、十五郎が梅安と彦次郎へ、
 「剣術を、すこしやると、人がわかってしまう。
 つまらんことだがね。お前さんたちのいうことに、
 嘘はないらしい」¹⁵⁾

それが縁となり、彼は梅安と彦次郎の仲間となった。ときどき品川の梅安の家へ来て、親しく酒を飲んでいくという。

高齢の九万之助は、病を得て亡くなったのであるが、遺言状を残し、道場の後継者として小杉十五郎を指名していた。十五郎は九万之助の直系の弟子ではなく、さらに門弟となつてからも日が浅かった。しかし、九万之助は、十五郎の人柄と剣の力をいたく気に入っていたという。面白くないのは、同門の大身旗本の息子たちで、「あのような素浪人に、この牛堀道場を渡してなるものか」といきり立った。

次期道場主の座を狙って、十五郎の暗殺を謀り三人で斬りかかるが、逆に二人斬られてしまった。独りの片桐謙之助の父親は、幕府の書院番頭という要職についている片桐主悦助であった。

『梅安初時雨』に、次のように書かれている。

「これは、どうにもならぬ。あなたひとりが悪者にされてしまひましようね。なんといつても片桐謙之助の父親は、幕府の顔利きらしい。さて、小杉さん。どうなさる？」
 「わからぬ……」
 「まさか、町奉行所へ名乗って出るつもりではないでしょうね？」
 「ばかな……」
 「となれば、道は一つきりしかない」
 「え……」
 「江戸を売ることですよ」¹⁶⁾

梅安は、自分を頼って訪ねてきた小杉十五郎の気持ちを嬉しく受け止めた。二人は、上方へ旅に出ることになった。それは、十五郎が牛堀道場の跡目相続を諦めることを意味していた。

何よりも、十五郎は幕臣の子弟を殺害しているだけ

に、人相書きが配られている「お尋ね者」になったのである。殺害された家族も当然のことながら、彼の命を狙うことになる。

梅安は、小杉十五郎の身柄を、大阪の白子屋菊右衛門に預けることにした。表向きは、道頓堀の料理茶屋「白子屋」の主人・菊右衛門であるが、暗黒の世界に絶大な力を持っている香具師の元締でもあった。

菊右衛門の「決して仕掛けの道へは入れない」という言葉を信用した梅安は、「二、三年の辛抱ですよ」と十五郎にいった。しかし、七歳の頃から江戸に長く暮らした十五郎は、江戸に帰りたい一心と、剣客の道を絶たれた思いから、暗黒の世界へ自ら身を投じてしまったという。

梅安の知らないところで菊右衛門の誘いに乗せられ、二件の仕掛けを行なっていたのである。十五郎には、もはや出世欲も名誉欲も叶わない。世の中とかけ構いなく生きていかなくてはならない。そこに、彼の望郷の念が加わってくる。十五郎は自暴自棄になったわけではないのであるが、ニヒリズムの影が漂うのは当然である。

6. 料亭の女・おもん

浅草の橋場にある料亭「井筒」は、梅安が行きつけの店であったという。料亭といっても、泊まることができるし、いわくある男と女の密会の場所ともなる。梅安は、奥庭に面した離れに泊まり続けることもある。彦次郎が来て、気の利いた肴を前にして酒を酌み交わすこともしばしばであった。

三十五歳になる座敷女中のおもんは、「井筒」で働いている。彼女は亭主に死に別れ、九歳になる芳太郎を阿部川町に住む大工の父親の許に預けていた。無口でどちらかといえば陰気な感じを与える女である。

ある日、昼ごろに目覚めた梅安のもとへおもんが入っていくと、不意に腕をつかまれた。梅安にじっと見つめられると、彼女は身動きができなくなったという。『殺しの四人』に、次のように書かれている。

抱きすくめられ、抱き倒され、帯もとかぬままに、おもんの乳房が梅安の手の中にあつた。意外なほどのふくらみをたたえた乳房であった。
 「せ、先生。いけませんったら……」
 「いいよ」
 ぐつたりと、おもんが四肢の力をぬいた。たもとに顔をおおい、次の間に走りこんで身じまいを正

し、口もきかずに離れから出ていった¹⁷⁾。

その夜、おもんは自ら梅安のいる離れに忍び込んできた。いままで堪えてきたものが堰を切ってほとばしるような激しさで、梅安の求めに応えたという。

梅安が「井筒」に泊まれば、そのたびに必ずおもんは離れに忍び込んで来た。だんだんと大胆になってきて、忍ぶというよりは女房気取りなのであるが、決して「鼻につかない」ところが、梅安には不思議でなかった。梅安もまた、おもんといるときには、今まであまり経験したことのない、安穩な気分になることができた。『春雪仕掛針』には、次のように書かれている。

「や、白魚だね」

「先生の、お好きなようになさいますね？」

佃の沖で魚れた白魚が平たい籠に盛られてい、小さな細い透明な魚の体から籠の目が透き通って見えるように思えるほどだ。それに黒胡麻の粒一つを置いたような愛らしい白魚の目はどうだ。食べてしまう自分が憎らしいとさえ感じられてくる。

おもんは、火鉢へ小鍋を置き、塩と酒とで淡味の汁を煮たてた。

「こんなもので、ようございますか？」

「どれ？ ……ああ、よしよし」

梅安は、それへわずかに醤油をたらしこみ、菜箸にすくい取った白魚を鍋へ入れた。

こうして、さっと煮た白魚へ、潰し卵を落としかけて食べるのが、梅安の好みなのである¹⁸⁾。

料亭「井筒」の主人夫妻も、梅安とおもんの仲を認めている。二人は、相州の江ノ島へ四日がかりで遊山に出かけたこともある。梅安は、おもんへ少くない金を渡そうとするが、決して受け取らない。たくさん金を一度にもらってしまうと、「先生がどこかへ行ってしまうような気がして……」いやだというのである。『梅安最合傘』に、次のように書かれている

顔が美しいわけでもない子もちの三十女と、いつまでたっても、

(切れないのは、おもんが、すこしも、私の内ぶところを突かないからだ)

梅安は、そうおもっている¹⁹⁾。

おもんは、梅安と彦次郎が、何かわからないことをしているとは思っても、決して問いかけてはこない。彼女は、梅安の自宅の所在さえも知らないはずである。

もし、梅安と彦次郎の二人が金で殺しを請け負っていることを知れば、彼女の驚きは想像を絶するものがあると考えられる。

おもんが心配しているのは、「先生が、私に飽きておしまいなすたら、どうしよう」ということだけであつた。そのためには、ひとたび内ぶところへ入ってしまったら、すべてが終わりになるということを肌で直接に感じていた。お金も貰いすぎては、いけないのである。子供を生して、独りで稼いでいる三十女の知恵と勤がもたらした自律の行動であつた。

一方で、梅安もおもんとの仲を、ただの遊びと割り切ってはいない。品川の自宅の床下に埋めてある壺の中に、三百五十両もの金を隠してある。自分にもしものことがあれば、事情を知っている彦次郎から、その大半をおもんに渡してもらうという。それ程、梅安はおもんのことを真剣に思っているのである。

7. おわりに

仕掛人たちが、全力を挙げて困難な仕掛けをなし遂げた後の満足感は、本人たちにしかわからない喜びの時であると考えられる。もちろん彼らにとって、気持ちのよい爽快な達成感が溢れるような仕掛けもあれば、索漠として暗然たる気分からしばらく抜けきれない仕掛けもあるであろう。

先に述べた『闇の大川橋』では、梅安が源森橋から小舟に飛び降り、安部主悦之助を殺した。その仕掛けを依頼したのは、父親の安部長門守だったという。

後日、梅安は「こんなに気持ちのよい仕掛は久しぶりだよ、彦さん」といって、彦次郎の家へ熱い根深汁とご飯を食べに行つた。早く「井筒」へ戻って、熱い酒を飲もうという彦次郎の誘いを、断つての行動なのであつた。

「いや、今夜は、お前さんのところへ泊ろう」

「え……どうして？」

「仕掛けたすぐ後で、おもんの顔は見たくないのだ」

「なある……」²⁰⁾

梅安やにとって、「仕掛け」の直前には、動物的な性欲を必要としても、ことが終われば食欲の方が勝るようである。大きな仕掛けに成功し、品川の梅安宅に彦次郎と小杉十五郎が揃い、鰹一尾を料理しようとしている。季節は、いうまでもなく初夏のころである。燕が一羽、軒下にいる彦次郎の頬をかすめるように飛

び立ったという。『梅安鯉飯』に、次のように書かれている。

彦次郎が鯉の入った桶を抱えて立ち上がり、
「梅安さん、まず、刺身にしようね？」
「むろんだ」
「それから夜になって、鯉の肩の肉を搔き取り、細かにして、鯉飯にしよう」
「それはいいなあ。よく湯がいて、よく冷まして、布巾に包んで、ていねいに揉みほぐさなくてはならない」
「わかっているとも」
「薬味は葱だ」
「飯へかける汁は濃目がいいね」
「ことに仕掛けがすんだ後には、ね。ふ、ふふ…
…」²¹⁾

『仕掛人・藤枝梅安』は、料理や食べ物の情景が特に多いが、その中でも白眉といえるシーンである。季節感もさることながら、仕掛けをなし終えた男たちの心理を巧みに表出している。

「殺し屋」の世界を描く小説であるから、話は暗く凄惨になる傾向があるのはやむをえない。その中であって、食べ物の情景が物語を明るくし、酷薄で残忍な事件の印象を和らげている。ピカレスクロマンであるのに、天衣無縫なエピソードたちの魅力が横溢しているところに、この小説の特徴がある。

勧善懲悪を旨とする単純なストーリーではなく、また梅安たちが決して「正義の味方」というのではない。池波がイメージする現代の社会に生きる人間たちが、江戸の町に時代を移して暮らしているといえる。

池波が『藤枝梅安』シリーズを通じて描き続けたのは、矛盾の固まりというしかない人間の姿であった。

矛盾の最たるものは主人公藤枝梅安である。一方では鍼医者として人の生命を預かり、目の下に隈ができるほどの真剣さで打ち込む。その一方では、何の感情もなく平然と人を殺し、巨額の報酬を受け取る。どちらが本物の梅安なのか…という問いは無意味である。どちらも本当の藤枝梅安なのだ。梅安の場合、光と陰の対比は劇的である。我々の場合には、梅安に比べれば、まことに平々凡々たるものだ。けれども、毎日の生活の中で、『矛盾することを、しごく当たり前のよう繰り返している……』という点においては、梅安もわれわれ自身も何ら変わることはない²²⁾。

したがって、人間は善人であるとか悪人であるとか、明確にレッテルを貼ることができない「紙一重」の存在であるといえる。『仕掛人・藤枝梅安』に描かれた人間の「善と悪」は、他人から見れば矛盾するようであっても、本人にとっては矛盾なく一人の人間の中に同時に存在しているものであったといえよう。

文 献

- 1) 拙論：池波正太郎の人間観—梅安から鬼平まで—，研究紀要第37号（福島高専，1998）所収，pp. 74—81を参照されたい。
この論文においては、梅安について十分に論じることができなかったため、本稿で改めて取り上げることにした。
- 2) 拙論：池波正太郎『剣客商売』の人間観，研究紀要第38号（福島高専，1998）所収，pp. 68—75を参照されたい。
- 3) テキストからの引用は、池波正太郎：完本 池波正太郎大成 第十六巻 仕掛人・藤枝梅安，（講談社，1999）により、頁数を記す。p. 13
- 4) 同前。
- 5) p. 78
- 6) p. 29
- 7) 池波正太郎：「あとがき」，殺しの四人 仕掛人 藤枝梅安（講談社，1980）所収，p. 242
- 8) p. 14
- 9) p. 145
- 10) p. 33
- 11) pp. 112—113
- 12) pp. 53—54
- 13) p. 94
- 14) p. 137
- 15) p. 161
- 16) p. 185
- 17) p. 43
- 18) pp. 123—124
- 19) p. 331
- 20) p. 257
- 21) p. 282
- 22) 佐藤隆介：〔仕掛人・藤枝梅安〕賞味法，池波正太郎読本＜別冊歴史読本 作家シリーズ①＞（新人物往来社，1997）所収，p. 233